# 月語り　ー花の章ー

小春

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
月語り　ー花の章ー

【Ｎコード】
Ｎ２４０５Ｚ

【作者名】
小春

【あらすじ】
異世界平安絵巻。主人公、加賀美は大納言の六の姫として生まれるが、母の身分が低い為、神官の元に預けられ、父と大納言が他界した後、巫女となる。加賀美は他人にはない能力を、持っていた。加賀美をいつも守ってくれる、渡り、従兄の継俊と共に、呪術師の真部人麻呂に立ち向かう。ちょうどその頃、都では月の姫という得体のしれない姫に、貴族の男君が求婚しては、無理難題を押し付けられ、臥せる者まで出ていた。町の衆では、土塀修理の九、屍運びの蓮などに出会う。加賀美と渡り、継俊の三人の心の動き、触れそ

うで触れない微妙な関係。蓮の初恋のような、でも、まだ恋までいかない感情。登場人物の心が、事件と共に動く。

## 序（前書き）

初めて投稿しますので、読みづらい箇所があるかとは思いますが、ご容赦ください。

# 序

序

なぜ、こんなにも胸騒ぎがするのか。
今宵の満月のせいなのか、それとも・・・。
そこまで思考を巡らしたとき、風が動いた。
風は吹くものだとは限らない。
人間の気配を感じるとき、風は動く。
彼女は振り返りもせず、呟くように言った。
「どうしました、渡り《わたり》。」
それが例え呟かれたものであっても、月明かりが届かぬ茂みに向かって放たれたことは、その男にはわかったのであろう。
茂みの中から、若く凛々しい男が現れた。
二十代半ばを少し越しているであろうか、肩まである髪は一つに束ねられ、薄い緑色の単に、それより少し濃い緑色の小袴を身につけていた。
渡りと呼ばれたその男は、音も無く、すっと縁側のほうへ近づき、縁側の下で、片膝をつき頭を垂れた。
平安の都の夜は深く、ゆったりと時が流れる。
灯りは月明かりのみ。
幻想的な夜である。

神を祭る祭壇の前に座っていたその女は、静かに立ち上がった。
落ち着いて見えるが、歳は、十七，八といったところか。
白の単に緋色の袴をはき、月明かりに照らされた豊かな黒髪は、例えようもない光を放っていた。
巫女の姿に美しい顔立ち。
そして、その黒い瞳は遠くをしっかりと見据え、その意志の強さを物語っていた。

彼女は几帳の前で、また座った。

「そこでは、遠い、近くへ」

それを聞き、渡りは音も無く板の間へと上がり、几帳の前で先ほどと同じ姿勢で片膝をついた。
二人は几帳を挟んで向かい合う。

「都の様子は、変わりありませんか？」

その小さく放たれた声は、確実に渡りの耳へ届く。

「はい、姫さま。」

「もう、姫などではない。わたくしは、神にお仕えすることにしたのです。」

少々、きつい口調だった。
何かを振り切ろうとしているように聞こえる。

渡りは「はい」と短く答えた。

もう十年くらい前になる。
ちょうど、庭一面に桃の花がさいていた。
姫と呼ばれた、加賀美（かがみ）の母が亡くなった。
大納言のお渡りを待ち焦がれつつ、病で亡くなった。

加賀美は大納言の六の姫であり、正妻の姫ではない。
母の実家は貴族とはいえ、低い階級の家柄で、加賀美を引き取らなかった。
そのため、正妻の実家に遠慮した大納言はこの屋敷で神官をしていた者に、姫を預けた。
そして、いつか自分の出世の為、宮中へ出仕させるつもりであったらしいのだが、その大納言も一昨年の流行り病でこの世を去った。

現在は正妻の兄が家を継いでいる。
宮中への出仕の誘いもあったのだが、加賀美はそれを了承しなかった。
そればかりか、父が亡くなってすぐに巫女となり、神に仕えることにしたのだった。

巫女になる決心をするには、宮中への出仕の拒否、そして、もう一つ理由があった。
彼女には他人には無い、ある能力があった。

決して、自らそれを望まなくとも、様々なものが見え、聴こえる。
一時はそれに振り回され、物の怪にとり憑かれたのではないかと、憔悴したことがあった。
しかし、巫女となり、少しはその能力を操ることができるようになった。

その能力は悲しいことですら、彼女にわからせる。
容赦はなかった。

大納言が亡くなって間もなくのことである。
ある日、出かける神官を見送ったとき、なぜか、「もうお帰りにはなるまい」と悟った。
「お気をつけて」という声がすでに震えていた。
涙が止まらなかった。
やはり、出かけられた先で、突然お倒れになり、帰らぬ人となられた。

その後も、失せ物や病気の見立てなど、相手を見たとき、様々なものが見える。
しかし、そのようなことが兄に知れれば、どのようなことになるか。
身分制度の厳しいこの時代に、呪術師まがいの者がいるとなれば、恥となろう。
だから、加賀美は自分の能力をあまり他人には、知られたくなかった。

そんな中、彼女の能力を理解し、貴族の争いから彼女を守ってきたのは、亡くなられた神官と神官に仕えていた、下働きの渡りだった。

# 1

一月ほど前、加賀美には不思議な声が聞こえた。それは、もうすぐある一人の姫が現れるという。この名は「月の姫」。詳細はわからない。加賀美としてはその兆候がないか、都の様子を渡りに調べさせたというわけだ。

「宮中も今のところかわった様子はないようです。継俊（つぐとし）さまに文で確かめています。わたくしの取越し苦労であればよいのだけれど。」

継俊は父方の従兄にあたる人物で、彼とは幼い頃から仲が良かった。彼もまた、加賀美の能力を知っていて、彼女の味方だった。

「この満月を見ていると、わたくしは不安になる。月の姫とはどのような姫であろうか。近頃の貴族のありようを考えると、気持ちが重くなる。私利私欲に走る者も多く、民は苦しんでいる。月の姫とは・・・。」

「あまりお考えにならないほうが。加賀美さまのお味方はおりますゆえ、ご安心なさいませ。都が那良（なら）より遷都されて二十年、まだまだ庶民の暮らしは困窮致しております。貴族の方々のお振る舞いも目に余るものがございます。しかし、それは帝もお気づきのことと思います。」

そこまで語ったとき渡りは、はっとした。

少し、口が過ぎたと思ったのだ。帝、という言葉を身分の低い者が口にするなど到底考えられなかった。

しかし加賀美はそんなことなど気にもかけず、
「ありがとう。わたくしがこれではいけませんね。時は来ましょう。ゆっくりと待つことに致しましょう。」
と冷静に語った。

宮中にいれば庶民の暮らしなどわかりはしない。
加賀美はたまに都に出て、庶民の暮らしを見ていた。
貴族の横暴な姿や役人の強かな振る舞い、それに苦しめられている庶民の暮らし。
自分にはどうすることもできないのだが、それでも気になってしまう。

几帳が風に揺れる。
風が重い空気を運んでいったようだった。

「それより、たまにはお忍びで都の裏の様子でも見にいきませんか。この渡りがご案内いたします。」

「まあ、珍しい。渡りから誘うなんて。何かわたくしに見せたいものがあるのね。」

加賀美の声が軽やかになった。先ほどまでの、あの夜を滑るような声とは違っていた。

「姫さまには叶いません。」

渡りも少しおどけたように笑みを浮かべる。
例え几帳越しでもその様子は、加賀美には手に取るようにわかった。
渡りのほうも、それは重々、承知の上だ。

都の外れ、その男の粗末な小袴は見るも無残に汚れていた。
歳の頃は十五、六といったところだろうか。ばさばさになった髪は一つに束ねられてはいるものの、それが返って薄汚れてみえた。

何をしているのか、まともな仕事をしているようにはみえない。
目は獲物でも追っているかのように、ぎらりと光っていた。

都はここ三年続いた飢饉のため、餓死者や浮浪者を多く抱えていた。中心部は貴族たちが牛車を動かすため役人を使って排除していたが、中心地から少し離れたところでは、屍(しかばね)や浮浪者がいたるところにいたのである。

この男はその屍を捜しているところだった。
役人は目立つところの屍しか運ばない。
そのため、この男のように屍を捜しては運び、その報酬を得る者がいた。
彼は屍運(しかばねはこ)びの蓮(れん)といった。
このあたりじゃあ、ちょっとは知れた男だった。

## 2

「ちぇっ、なんでえ、生きてやがる。死んだらすぐに運んでやるからな。」

野草や山菜を売っている女の横でじっとして座っている老人の顔を覗き込み、蓮は言葉を吐きかけた。

横にいた女はぎょっとした目で、蓮を見た。

「なんでえ、なんでえ、おいらがよっぽど酷いことしてるみたいじゃねえか。おいらはよ、ちゃんとあの世ってところへ行けるよう、屍置き場に連れてってやろうってんだ。あそこじゃあ、三日に一度は坊主らしき奴がきて、加羅渡りの経とやらを唱えるんだ。ありがてえ話だよ。経とやらを聞くと極楽ってえとこ行けるらしいぜ。」

蓮は自慢げに話した。

野草売りの女は聞こえないふりをして、目を逸らす。

このあたりじゃ、蓮は乱暴者の札つきで通っている。関わるところくでもないことになるのは、目にみえている。

坊主だって役人に頼まれて経を唱えるわけではない。

もともと国家を纏めるため、加羅の国より取り入れた宗教だ。気の利いた身分の高い者は仏教の教えを学び、高級な役職に就き寺などを与えられ庶民を先導してきた。当然それに反発し本当の教えを説こうとする者もいるわけで、報酬などとは別に人を助けようと修行僧となり、経を唱える。貴族や役人は報酬など与えはしない。貴族たちにとって死んだ人間など、どうでもよいのだ。死んだ人間からは何も取れはしない。

仕方がないので屍を片付けた蓮たちに、ほんの一握りの粟や稗を

やる。そうすることにより都の清掃を行い、少しでも疫病が増えるのを阻止したっかった。
蓮たちは蓮たちでそれを生業とし、その微々たる報酬で生計を立ててていた。

「ふんっ、どうせおいら達は人間のうちに入ってねえよ。お偉い奴だけが得をする世の中だよ。」

蓮は不平不満を撒き散らしながら、小石を思いっきり蹴った。その小石は歩いていた少女の足を直撃した。普通の人間が蹴ったものではない。ましてや蓮が怒りを込めて蹴った石だ。当たれば痛い違いない。だが、運の悪いことに当たってしまった。

少女は「痛いっ、、」と言って足を抱えてその場に座りこんだ。

「・・・ああ、今日はどうしてこう間が悪いんだ。」
蓮は吐き捨てるように言った。
そしてその娘に駆け寄る。

「・・・大丈夫かい？」

娘は涙を堪えて頷いた。

「悪かったな。」
蓮が娘の足をみると、そう酷い傷ではなかったが血が出ていた。
蓮は横の野草売りの女を睨みつけると、
「何か、拭いてやるものを持ってねえか？おいらの小袖じゃあ汚れてて傷の手当にもならねえや。」
脅しつけた。

野草売りの女はそういうことならと、後ろにある籠の中から一枚の布を取り出した。

「ありがとよ。」

そう言って蓮は娘の足の手当てをしてやった。

この頃、布は貴重なもので庶民は自分の衣を持つのがやっとだった。ましてや染めた布で出来た衣などは貴族しか着ることはなかった。

「よし、できたぞ。もういいだろ、早くあっちへ行きな。」

蓮は片手を振り、娘を追い立てた。

しかし、娘はそこを動こうとはしない。

着物は古く粗末な小袖ではあったが、汚れてはいない。

顔はきりっとして、気が強そうだ。

蓮は自分とあまり歳は違わないと思った。

「どうしたんだい、あるけねえのかい？」

娘は首を横に振った。

「なにか言わねえと。わかんねえよ。」

蓮の言葉にその娘は大きな声で言った。

「わたし、そこのお爺さんを連れて帰りたい。」

蓮は面食らった。

「ほっといても、もうじき死んじまうんだぜ。おめえの爺さんかい？」

娘はまた首を横に振り、

「わたしは、真照寺（しんしょうじ）という寺にいるのですが、そこの尼様に育てられました。今、尼様は死にかけている人を連れてきては、穏やかな気持ちであの世へ行けるよう、体を拭いてやり手を握り、経を唱えてやるのです。なので、そのお爺さんを連れて帰りたいのです。」

蓮は鼻で笑った。

「おれは、屍しか運ばないんだ。あの爺さんはまだ生きてやがる。第一、その尼さんとは商売敵だぜ。その寺に運べば、おれの稼ぎは減るんだ。なんで、おれが損するようなこと、しなきゃなんねんだ。おれは、その爺さんが死ぬのを楽しみに待ってる奴だ。」

それを聞いて、気の強そうなその娘はそれを押し殺すように、涙を流してみせた。

「・・・・でも、わたしには運べません。足も怪我をいたしておりますし・・・。」

娘は蓮に手当てをしてもらった足を痛々しそうに撫でた。

「・・・・、わかったよ、運べばいいんだろ？」

とんでもない娘に関わったものだと思った。

あんな気の強そうな娘が涙なんて流すはずもなく、傷だってそんなに深くはない。ほんのかすり傷だ。優しくなんてしなければよかったと蓮は後悔した。

蓮はあたりを見渡した。屍を運ぶための板に小さな木の車をつけた道具は持っていた。しかし、生きた人間を運ぶとあれば、話は別だ。死体は少々傷をつけても文句は言わない。ところが、生きた人間となれば、引き摺るわけにはいかない。

「ちぇっ、面倒だな。」

と、困っているところに、
「兄貴、なにやってんすか？」
これまは小汚い、蓮より随分小さい男がやってきた。歳も蓮より二、三歳下のようだ。
しかし、蓮のようなとげとげしさは感じられない。
「おう、ちょうどいいところへ来やがった。」
蓮は嬉しそうに手を叩いた。なかなかいい。

## 3

「おめえ、この爺さん運ぶからよ、手伝ってくれねえか？」

その小男は爺さんの顔を覗き込むと、不思議そうに蓮を見ると、

「兄貴、この爺さんまだ、生きてやすぜ。」

と悪気もなく、さらりと言った。

「そんなこたあ、分かってるよ。ただ、このお譲ちゃんが、その爺さんを連れて帰りたいんだとよ。」

蓮は呆れた様子だ。

「へえ、珍しい人もいるもんだ。いいっすよ。今日は仕事も終わってるし、兄貴に付き合っても。」

そう言って、その小男はひょうひょうとした様子で、鼻を擦った。

「じゃあ、話は早えや。おめえ、爺さんの足を持ちな。おれが頭のほうを抱える。いいな。」

二人は爺さんをひょいと抱え、蓮が持ってきた板の上に乗せ、二人で抱えた。もう、餓死寸前の爺さんであったから、体重など感じられない。かえって、蓮が持ってきた板のほうが重いくらいだ。

「で、その何とかって寺は何処にあるんだい？案内しろよ。」

蓮は娘に向かって言った。

「西のはずれにあります。ご案内致します。」

娘はさっさと歩き出した。足が痛いようには見えず、さっきまで

涙を流していたのが嘘のようだった。

「まったく、現金な野郎だぜ。」

蓮は娘に聞こえるよう、わざと大きな声で言った。

その娘を先頭に、頭のほうを抱える蓮、そして足のほうを小男と三人は縦に並んで歩き始めた。

「ところで兄貴、その娘さんは何て名なんです？」

「おれも知らねえよ。」

蓮のぶっきら棒な答え方に反応するように、娘は答えた。

「由衣（ゆい）です。」

運び始める前とは違い、はっきり答えた。気の強さは隠せない。

「へえ、おいら九（きゅう）ってんです。九番目に生まれたから九です。今、土塀修理屋（どべいしゅうりや）のおばばのところで世話になってます。都の南のはずれです。兄貴もそこにいるんすよ。」

九というその小男は娘に向かって、大きな声で言った。いかにも人の良さそうな男である。

「へっ、九、人が良いのもいい加減にしといたほうがいい。あんまり人がいいのは馬鹿ってんだよ。」

蓮はふてくされたように言った。

九とは三年ほど前に会った。人懐こい性格で、蓮を恐れることなく、本当の兄貴のように慕ってくる。今、九が言ったように住むところも無い蓮に土塀修理屋のおばばを紹介し、連れていったの九だ

った。
九はそこで、職人をしている。
「いつもの兄貴じゃないですよ。だって、いつもだったら生きた爺さんなんか運ばないと思いやすぜ。」
「まあな、それがどうしてか、こうなっちまいやがったのさ。」
ふたりは他愛もない話をしながら、由衣という娘の後ろをついて行った。その間、由衣は彼らの話に興味が無かったのか、それともあえて話さなかったのか、黙りこくったままだった。運んでいる爺さんのほうも当然といえば当然だが、何も言わず、目を瞑ったままだった。
少し日が西へ傾きかける。
三人、いや、爺さんも含めて四人は夕陽へ向かっていつの間にか無言のまま、歩き続けた。
どのくらい歩いただろうか。いくら爺さんが軽くても、そろそろ二人とも手が疲れてきた。
「まだ、つかねえのかよ。」
蓮が痺れをきたして言った。
「もうすぐです。ほら、あそこに竹藪が見えるでしょ。あそこにある、あの寺です。」
由衣は竹藪を指差した。夕陽が邪魔でよく見えなかった。竹藪は見えるものの、肝心の寺らしき建物が見えない。
「よかったっすね、兄貴。もう、おいら手が痺れて、足も痛くて、くたくただ。」
九は前方をよく見もせずに言った。

「何、言ってやがるんだ。そんな寺なんかあるのかよ。夕陽が眩しくておいらにはよく、見えねんだが。おい、おめえ、物の怪じゃねえだろうな。」

由衣はくすりと笑った。

「蓮って、以外に臆病なんだ。本当に物の怪なんていると思ってるの？」

由衣にそう言われて、蓮は顔を赤くして、かっとなった。

「馬鹿にするんじゃねえよ。物の怪が怖くて屍運びができるっかてんだ。」

「そりゃ、そおっすね。蓮の兄貴には怖いものはありやせんよね。」

九は真面目に言った。

蓮はこの娘に騙されているような気がしたのだった。都のはずれといっても、寺までは相当遠い。なのに、娘が、それも一人で運ぼうとしていたのが、納得できなかった。本当に物の怪ではないかと、蓮は柄にもなく疑っていた。

「ここです。」

竹藪のところまで来たとき、由衣が静かに言った。

それは荒れ果ててはいたが、確かに寺だった。

「まあ、由衣。何処に行っていたのですか。」

寺の門を潜るなり、一人の尼が心配そうに由衣に声をかけた。

「申しわけありません。都でこのお爺さんが倒れていたので連れてきましたが、西清尼（さいせいに）さまは？」

由衣の言葉を聞いて、その中年の尼は爺さんに気づいたらしく、「奥にお連れしなさい」と由衣に言いつけ、すぐに西清尼を呼びに行った。蓮と九は由衣に言われるまま爺さんを、奥へと運ぶ。

そこは、土間の上に莚が敷かれた簡素なところだった。すでに二人ほど、もう助からないであろう人間が横たわっていた。由衣の指示でその横に運んできた爺さんを莚の上に寝かせた。そして、爺さんの体を拭いてやるための湯を沸かしてくると言って、由衣はその場を離れようとした。

## 4

「もう、いいだろう？おいらたちは、帰るぜ。」
蓮は早くこの寺を立ち去りたかった。第一、蓮に人助けは似合わない。そのことは蓮自身が一番よくわかっていた。

「待って、もうすぐ西清尼さまがいらっしゃるから。会っていって。物の怪などではございませんから、ご安心を。」
由衣は蓮の心の内を見透かしたようにからかうと、その場を去った。

「兄貴、これは一本取られましたね。」
九からも笑われ、よけい蓮は機嫌が悪くなった。
そこへ西清尼とおぼしき尼が、先ほどの中年の尼に連れられてやってきた。
西清尼は年老いた尼で、少し腰が曲がっていた。そして皺の寄ったその手には、粗末な数珠が握られていた。
「由衣がご迷惑をおかけ致しました。今日わたくしの使いを頼み、都に出したのですが、あの子ときたら、あなたがたにまでご迷惑をおかけしたようで。」

「いえいえ、人の役に立ったのなら、おいら、迷惑なんてありません。」
蓮より先に九が嬉しそうに答えた。

「おいらは、迷惑だがな。」
蓮は面白くなさそうに、口を尖らせた。
「へんだろ？もう死んでいくんだぜ。助かりもしねえ、そんな人間に何かしてやって、あんたに何か得なことでもあるのかい？」

西清尼はその年老いた顔に、少し笑みを浮かべた。
「正直なかたですね。本当に死んでいく者は何もわからないのでしょうか？最後に見るものは何なのか、それを持って極楽浄土へ旅立つとしたら・・・？」
そう言うと西清尼はしわがれた手で、蓮の手を握った。思わず、蓮は手を引っ込めた。
「幼い頃は皆、母に手を握られたものです。」
「おいらは捨てられたよ。親の顔なんて見たこともねえよ。」
西清尼はまた少し笑みを浮かべた。
「由衣もそうでした。皆、そのような者たちばかりです。でも、懸命に生きようとしている。そして、その傍らで、死を迎えようとしている者もいるのです。どんなに偉い貴族であっても、死は与えられます。」
いかにも、尼の言いそうなことだ。いつもの蓮ならば屁理屈の一つや二つ調子よく出てくるのだが、どうもこの年老いた尼は苦手だ。調子が狂う。

「ちぇっ、いつもと違うぜ」と心の中で蓮が毒づいたとき、九が尼に手を合わせながら、涙を流し始めた。
「おいら、……うれしいっす……仏様だぁ。」
「九、おめえ本当にいい奴だな。でもおめえは単純すぎるんだよ。」
そう言いながら、九のあまりの感動に冷めた視線を送りながら、蓮は何だか釈然としないものを感じ、苛苛した。
しかし、西清尼のほうはさして気にした様子もなく、「もう、そろそろ日が暮れます。早くお帰りなさい。そしてまた、いつでもいらして下さい。」とやさしい笑顔で合唱した。

二人が、塒である土塀修理屋のおばばの家に辿り着いたのは、もう日がどっぷり暮れてからのことであった。なんとか月明かりを頼りに、家に辿り着いた。

「二人揃って何やってんだい？もう、おてんとう様は何処にもいやしなしよ。物の怪にでも喰われちまったのかと思ったよ。ま、あんた達を喰うような物の怪なんていないだろうけどね。間違って喰ったら、腹壊しちまうよ。」

そう言っておばばは豪快に笑った。

「早く、夕飯、食べておくれよ。本当に、片付きゃしないよ。」

稗と粟に雑草ともつかないものが入っている雑炊を、二人の前に出した。

おばばのところの職人は九以外は通いであったので、おばばの家の離れに住んでいるのは九と蓮の二人だけだった。

もともと土塀修理屋はおばばの旦那がやっていた仕事だったが、先の流行り病で、親方である旦那が亡くなり後の仕事を九たち職人を使って、おばばがやっているのである。おばばとはいっても、全体の髪は黒く、ところどころに白髪が混じっている程度だ。この時代、五十が近いとなれば、おばばと言われても仕方が無い。だが、本人はちっとも気にしていないようだ。むしろ、おばばと言われたほうが、迫がつくと思っているらしい。たしかに、彼女には言いようの無い迫力がある。

九は出会った娘のことや、寺の尼のことなど雑炊を口にかき込みながら、必死に話した。そして、話が終わるまでに、五杯の雑炊を腹に入れた。こんなに食べながらこれだけの話ができるのは、いろいろな人間を見てきたが、九しかいないと蓮は呆れた。

蓮は黙ったまま、二杯食った。

「お前たちが会ったその尼さん、近頃じゃあ評判だよ。死んじまって経を唱えるのが普通だ。ところが、死ぬ前から極楽へ行けるんだって、最近じゃあ、その寺に寄付する者もいるくらいだ。でも、たくさん持って行っても、少ししか受け取らないらしいんだ。だから、あの尼さんは本物だって、みんな拝んでるよ。」

「へえ、兄貴は物の怪だって思ったらしいけど。」

九はいつものひょうひょうとした様子で言った。九は嘘がつけない。

「物の怪だって？冗談じゃないよ。本物の仏様だって。」

おばばは胸を張って言った。おばばも九と同じで、嘘が嫌いで、正直者である。

おばばは二人が食べ終わるの見ると、茶碗をすぐに片付けた。

二人は離れへ行き、自分たちの寝床に入った。九はすぐにいびきをかきはじめた。

しかし、蓮はなかなか寝つかれなかった。今日会った由衣という少女の顔、そして、自分が連れて行った爺さんの姿、西清尼のしわがれた手、声、言葉、全てが脳裏に焼きつけられ、幾度寝返りをうっても寝つくことができない。それどころか、ますます、いろいろな事が頭の中を駆け巡る。今までに無いことだ。眠りが来ない。ようやく空が白みはじめたころ、蓮はやっとの思いで眠りについた。

それから数日後、都で聞き覚えのある声に呼び止められた。

「……蓮？」

蓮は振り向く。それは先日こき使われた相手だった。

「……由衣か、また、何のようだい？おれをまたこき使おうって魂胆じゃねえだろうな。」

「ごあいさつね、そんなんじゃないってば。あんた、屍運んで稼いでるんだろ？この前は悪かったよ。」

由衣は素直に謝った。その姿はこの前の拗ねた印象とは、随分違っていた。

「それなら今日はこんなところで何やってるんだい？」

今日は用事をいいつけられそうもないので、蓮は由衣に安心して尋ねた。

## 5

「西清尼さまのお言いつけで、そこの商人の家にお礼の文と多すぎたお布施をお返しに来たの。」

「何だい？その多すぎたお布施ってえのは。」

「そうでしょ、おかしいでしょ。西清尼さまは一回のお布施があまり高額だと、多すぎたといってお返しになるのよ。」

由衣は不満そうに言った。そういえば、おばばも同じようなことを言っていた。

「でも、全部貰っておけばいいじゃねえか。」

「あまり高額だと寺の活動に口出しされてはいけない、というのよ。どうしても、って時にお願いしにくいらしいの。」

「いろいろあるんだな。おいらは難しいことはよくわかんねえけど、仕方ねえな。尼さんがそう言うなら……それより、この先にまだたくさんの菜の花が咲いているところがあるんだが、見に行くかい？あそこは他の奴には内緒の場所なんだ。まだ、九にも教えてねえんだ。」

蓮はがらにもなく照れくさそうに言った。由衣はそんな蓮を見て「うん」とだけ頷き思いの外、素直だった。由衣は蓮の後ろをついて行く。蓮の秘密の場所まで無言で歩いた。女の子と歩いたことのない蓮はないをしゃべっていいのかさっぱりわからなかった。

由衣は由衣で誰かに見られてはいないかと、蓮から離れて歩いた。

しばらく歩き、丘を登り詰めたとき、視界が広がった。

そこには、黄色い敷物が一面に敷かれていた。由衣は思わず「す

ごい！」と叫んだ。今まで見たことのない風景画がそこには広がっていた。

「すごいだろ、初めて見たときおいらも驚いたんだ。」

蓮は恥ずかしそうではあるが、自慢げに言った。たしかに、蓮の言うとおりすばらしい風景だった。由衣は菜の花の香りに包まれ、しばらくは夢見心地だった。

しかし、ずっと見ていたいと欲したとき、由衣は自分の中に全く別の感情が噴出すのを感じた。そして、関を切ったように話はじめた。

「蓮、わたしね、一度でいいからいい着物を着て、良いもの食べて暮らしてみたい。どんな気持ちになるんだろう。わたし、親の顔なんてまともに知らない。西清尼さまに育てられたようなものだから。西清尼さまには生きるだけのものは与えて貰ってるし、それには感謝してる。でも、いつも何で生まれてきたんだろうって思うんだ。贅沢して暮らしている人もいれば、西清尼さまのように自分は満足な暮らしもせず、周りのわたしたちだって、お腹すかしてる。不公平だよ。」

由衣行き場のない思いを抱えて生きているのだと蓮は思う。蓮自身も似たような境遇だったし、そのような子供たちは掃いて捨てるほどいた。誰もそんな子供たちに目を向ける余裕は大人にはなかった。

その中で翻弄されながら、彼らは生きていた。というより、それでも生きていた。

「由衣、負けんなよ。どんなに苦しくったって負けんなよ。」

蓮は、由衣に言いながら自分自身にも言い聞かせていた。

由衣は大きく息を吸うと笑顔を見せた。

「蓮、気持ちいいね。久しぶりだよ。こんなに大きく息吸ったの。」

「なに言ってんだ。空気吸うのは貴族もおいらたちもみんな一緒だ。吸わない奴は死んでんだよ。そいつらは、おいらが屍置き場に運んで稼ぎにするんだ。」

蓮はそう言って笑った。由衣つられて笑った。

「由衣、お前はそうやって笑ってたほうがいい。生きてるきがするだろ、笑ってたほうがさ。」

蓮の言葉に由衣は落ち着きを取り戻した。

蓮は春風が吹き抜けていくのを感じた。そして、春風は二人の思いを菜の花畑へと運ぶ。

ますます、春の暖かい日差しに暖められ、菜の花がほころんでいく。

二人はいつまでも菜の花を見ていた。

その日、加賀美は町の娘の格好をしていた。薄い桃色の小袖がとてもよく似合っていた。渡りが誘ってくれた、都へ出かける日だった。貴族の姫がこのような格好をして都へ出かけるなど、ありえない。世話をする女房には教えてはいるが、他の者には言わぬよう口止めしている。腹違いの兄に知れるのは困る。近頃では、なにかと宮中への出仕を求めてくる。貴族の姫の出世とは宮中に上がり帝の女御になることだ。しかし、それもそう容易いことではないのだ。

今日のようなことが兄に知れれば、見張りの厳しい都から離れた屋敷に移されるかもしれない。

加賀美の一族は宮中では第二勢力といったところだろうか。現在の帝の母、皇太后様は不二原（ふじわら）の姫であり、まだ、后を持たない帝になにかと不二原の姫を推挙したがる。ところが、帝はなかなか首を縦に振られぬ。さすがの皇太后様も手を妬いておられるとか。先の帝が崩御されて二年、皇太后様の権力は強まる一方で、その為か、帝はよけい母君のおっしゃることを、お聞きにならない。加賀美の一族にしてみれば、助かっているというものだ。この上、后が不二原氏から出れば、その権勢はもう誰も止めることができなくなる。

このような状況であるからして、兄の光則（みつのり）は尚のこと加賀美を出仕させたがるのだ。たとえ、后でないにしても、帝の皇子を授かれば格段に勢力は強まる。第二勢力とて、いつ覆されるかわかったものではない。少しでも、自分の一族の姫を宮中に出仕させたいところなのだ。

兄の気持ちはわかるが、そうはしていられない。

「ご用意はできましたか？」

几帳越しに渡りの声がする。

「ええ、いきましょう。ところで、今日は何処へ案内してくれるの？」

「少々、面白い人物をご紹介したいと思いまして。」

加賀美はにっこり笑った。神の前にいるときとは別人のように普通の姫だった。

「あなたが面白いというのなら、かなり変わった人物ね。楽しみだわ。」

渡りは苦笑いをした。
「わたくしの婆様の知り合いで、土塀修理屋のおばばというものがおります。そのおばばはよく都の様子を知り尽くし、しかも……。」
「正直」と二人の声は揃えたように響いた。
「姫さま……。」
渡りは見透かされたようでたじろいだ。
「とても、元気のよさそうなおばば様ね。正直で強くて。だって、正直な人は強いのよ。」
加賀美はいつになく、楽しそうだった。

## 6

二人は庭の隅から裏門のほうへと抜け、町へと出て行った。
都の中心部は活気づいていた。那羅より遷都三十年。都には商人が集まり、布や食料、茶碗や瓶、異国の品物など様々なものを売ったり、買ったりしていた。広場では踊りを披露する者や笛を吹いて聞かせる者、都には笑いや人の話し声が満ち溢れていた。それは光輝く光景であった。しかし、それがほんの一部の人々であることも加賀美は重々承知していた。

しばらく歩くと加賀美は空を見上げた。
「いかが致しました？」
渡りは加賀美の視線の先を見た。
そこには地上からまっすぐ上にのびている白い雲があった。
「あの雲、龍です。地龍が動いている。」
聞き慣れない言葉に渡りは首を傾げる。
「龍は地上の龍と地下の龍がいるものです。普段わたくしたちが見る龍は地上の龍です。地下の龍は地下深く眠っているもの、それが動くとなれば何か大きな力が動いているのかもしれません。」
心配そうに伺う渡りを見て、加賀美は微笑んだ。
「大丈夫ですよ。まだ、そう深刻な状況ではありません。ただ、気をつけておきましょう。」
だが、そう言ったときの加賀美はきつい表情になっていた。

賑やかな中心部を抜け、渡りは都の南へと加賀美を案内する。少しずつ店も減り、道の端で莚を広げ
野菜や干物を売っている。その傍らには浮浪者が寝ていたりもする。目を背けたくなるような光景だ。

「……待てえ、ど、泥棒だー。捕まえてくれー。」
向こうから棒を振りかざし中年の男が、まだ七、八才くらいの男の子を追いかけてくる。
「……渡り、……」
加賀美は渡りに何か言おうとしたが、横から出て来た男の罵声にかき消された。
「何でえ、何でえ、いい大人がよ、子供相手に大声出して。」
目つきの悪い狼のような男だった。男は子供を抱き抱えた。
その男を見て、追いかけてきた男の顔色がかわった。
「……、うわぁ蓮。……だがな、泥棒は許さねえぞ。いくら蓮でも泥棒の片棒担いだとあっては、役人に引き渡すぞ。」
男は恐々、一歩下がって叫んだ。
加賀美はそれを見ていられなくなった。
「わたしがその品物の代金をお支払いいたしましょう。」
蓮といわれたその男は、加賀美をぎろりと睨みつけた。
「よけいな口出しはして欲しくないね。貧乏人だったら泣いて喜ぶとでも思っていやがる。施しはいらねえよ。」
と言うと、子供が握っていた干物をその手から奪うと遠くへ放り投げ、抱えていた子供を下ろした。そして「早く行け」と叫んだ。
子供は蓮が下ろすと遠くに落ちている干物を拾い、走り去った。
「落っこちてるもの拾ったんだ。盗んじゃねえよ。」
蓮は平然と言うと空を見上げて笑った。
「この野郎、なんてことするんだ。無茶苦茶だ、今度こんなこと

しやがったら、ただじゃおかねえからな。」
と男はすて台詞を吐き、そのへんに落ちている小石を蹴って当り散らしながら、その場を立ち去った。

「ざまをみろ、あんまりケチケチしてやがるからこんな目に会うんだよ。」
蓮はその男の後姿に吐きかけた。
そして、加賀美のほうを振り向くと
「よけいな事すんなよ。どこから来たか知らねえが、この辺りの者じゃねえな。この辺りには、この辺りのやり方があるんだ。施しするんじゃあねえよ。」

「そんなつもりはありません。あの子を役人に引き渡すというからです。」
加賀美はきっぱり言った。

「へんっ、結局、相手は引き下がっただろ?あれでいいんだよ。」

「でも、盗みはいけません。」

「おめえ、あの子たちがどんな所に住んでいるのか知って言ってんだろうな。盗まなきゃ生きていけねんだぜ。おいらだってそうやって稼いで大きくなった。きれいごと言うな。」
加賀美には何も言えなかった。

「行きましょう、おばばが待っております。」
渡りが強い口調でその場を制した。

「この辺りでおばばといえば、うちの土塀修理屋のおばばか?」
蓮は頭を掻きながら尋ねた。

「うちのって、あなた、おばば様の身内のかたですか？」
加賀美は驚き、大きな目を見開いた。
「まあな、離れに居候ってところだ。」
蓮は平然と答えた。
「行きましょう。加賀美さま。わたくしがご案内致します。」
渡りは加賀美を促した。その様子を見て蓮は「ちぇっ」と舌打ちをすると、何処かへ消えた。さっきまでの騒ぎが嘘のように、辺りは静かになった。
渡りと暫く歩くと、壊れかけた土塀に囲まれた家についた。
そこが土塀修理屋のおばばの家らしかった。土塀修理が職業のようだが、自分の家の土塀は修理されることもなくぼろぼろだった。
渡りは裏口から、「おばば、おばば」と二、三度叫んだ。すると奥から五十くらいのまだ、おばばと呼ばれるには若い女が現れた。
「おう渡り、久し振りだね。あんたの婆様は元気かい？」
おばばは見かけの通り声も老婆のものではなかった。張りのある、それなりに若い女の声だった。
「はっ、元気です。」
「よかった。近頃、わたしの周りでは亡くなる人が多いんだよ。あんたの婆様には長生きして欲しいからね。」
そういうと、加賀美のほうへ目をやった。
「こちらだね、今日お連れすると言っていた姫様は。」
「加賀美さまです。」
渡りが紹介すると、おばばは深々とお辞儀をした。
「本当にお連れしてきたんだね、大丈夫なのかい？こんなところ

へお連れして。」

「おばばさま、わたくしがお会いしたいと申しました。」

加賀美は静かに笑った。

## 7

「こんなところじゃ何だから、上がってください。とはいうものの白湯しかありませんが。」

おばばは二人を奥へ通した。といっても入り口から上がったすぐ上の部屋だ。日当たりが悪く、部屋の中はかび臭かった。しかし、その部屋に徳利に刺した菜の花が一輪咲いていた。

おばばが白湯を持ってくる。

「本当に、こんな白湯しかありません。姫さまにお出しするようなものは何もありません。」

恐縮するおばばを見て、渡りが笑う。

「いつものおばばらしくないな。あまり硬くならないでくれ。おばばのいつもの話が聞きたくて、加賀美さまをお連れしたのだから。」

渡りの声は加賀美に落ち着きを与えてくれる。

「ところで、さっき蓮とかいう男に会いましたが、おばばの家の離れにいるとか。」

渡りも初耳らしく、その真相を確かめる。

「もう、蓮に会いましたか。何か悪さでもしてませんでしたか？」

渡りはそれには答えず、苦笑いをした。

「やさしいところもあるうだけどねえ、ほら、そこの菜の花も蓮が摘んできたんだよ。」

加賀美はもう一度、菜の花に目をやり、にっこり微笑んだ。

「九はどうしていますか？」
渡りが尋ねる。
「九はもうじき仕事から帰ってくるよ。相変わらず元気だよ。あんたによく懐いていたからね。最近じゃ、蓮のことを兄貴って呼んで、よく二人でいるよ。」
「大丈夫ですか？蓮という男、少し危ないような気がします。」
渡りのその言葉を聞いて、おばばは笑った。
「誰にでも、あんな時期はあるものだよ。あんたにも心当たりがあるだろ？」
おばばの問いに渡りは答えなかった。
「なあに、もうじき蓮も落ち着くよ。」

加賀美は、渡りもまた少年の頃は蓮のようであったと渡りの婆様から聞いたことがあった。
渡りの婆様は加賀美が預けられた屋敷の下働きに来ていた。渡りの婆様は女房たちが集まるまで、しばらく加賀美の身の回りの世話をしていた。

しばらく三人で他愛もない話をしていると、入り口のほうで九の話し声がした。
「九が帰って来た。呼んでくるから待っていておくれ。」
おばばはそう言い残し、九を呼びに行った。しばらくすると、おばばは九と見慣れぬ中年の尼を連れて部屋へ戻ってきた。
「何だか、この尼様のお話、聞いてやっておくれよ。」
おばばは困った顔をしてそう言った。

「わたしは真遍寺の西清尼さまにお仕えいたしております巡徳と申します。わたくしどもの寺に由衣という娘がおりますが、もう三日も帰ってまいりません。西清尼さまがご心配されておられるのですが、いまだ帰ってまいりません。先日、行き倒れのかたをこちらのかたが由衣と運んできたのを思い出しまして、お伺いした次第です。」

もともと白い顔をした尼なのだろうが、部屋が暗いせいもあって白を通り越し、青白く見える。随分、心配した様子だ。

「尼さま、おいらこの辺りの連中に聞いてみるよ。」

九はにっこり笑うと尼の返事も聞かずに、部屋を飛び出していった。

「おやまあ、九ったら元気がいいねえ。仕事以外のこととなると元気が出るんだから。あのくらい仕事も熱心だといいんだけどねえ。」

とおばばは少々、呆れて言った。それを聞いて、

「申し訳ありません。ご迷惑をおかけ致します。」

巡徳尼は丁寧にお辞儀をした。

「悪いねえ、何だか変なことを言っちまったようだ。」

おばばは調子が悪そうに笑った。

「何か言い残して行かなかったのですか？」

加賀美が尋ねる。

「特別、何も。その日はいつもと同じでした。由衣がいないことに昼頃気付きました。でも、しっかりした子ですから、夕方には戻ってくると思っていたのですが、とうとうその日は帰ってきませんでした。今まで、帰ってこないことなどありませんでしたので、西清尼さまが大変ご心配されて、方々、捜したのですが、とうとう見つかりませんでした。」

「でも、よくここがわかりましたねえ。」
加賀美は不思議そうに尋ねた。
「はい、お名前だけは聞いておりましたから、蓮さんとおっしゃるかたのことを尋ねますと、すぐにわかりました。」
それを聞いておばばは声を上げて笑った。
「蓮はよほど有名なんだね。それも、きっと悪のほうだね。」
「そりゃ、たしかに。」
渡りまで一緒に笑った。
「加賀美さま、その娘は神隠しにでもあったのでしょうか？」
渡りの問いに加賀美はゆっくり首を振った。
「巡徳さま、何か由衣さんの持ち物をお持ちではありませんか？」
しかし、巡徳は「いいえ」と答えた。
すると今度は「蓮、そこにいますね」と加賀美は振り返った。皆も、加賀美の視線の先を見た。すると薄暗い部屋の柱の影から蓮が現れた。
「蓮、そこの菜の花は由衣さんが摘んだものでしょ？」
加賀美の問いに蓮は柱にもたれ掛かったまま、「ああ」と答えた。
「渡り、その花を花瓶のままここへ。」
渡りは加賀美に言われるまま、彼女の目の前に置いた。
加賀美は懐から金糸の縫い取りのある小さな袋を出し、その中から朱色の組紐の付いた小さな土鈴を取り出した。それをカランカラ

ンと二度ほど菜の花の上で振ると、今度は二回柏手を打ち小さな声で「神様、少々わたくしにお力をお貸しください。」と言って手を合わせた。

皆が固唾を呑んで加賀美を見つめる。

暫くすると、加賀美はまた柏手を二回打つ。

「綺麗な着物を着ている姿が見えました。ただ、あまり楽しそうではありませんでした。でも、誰かに邪魔をされて、消されました。少々、厄介なことに巻き込まれいるかもしれません。ただ、今はまだ生きておられます。すぐに殺されることは無いとは思いますが。」

渡り以外のその場に居合わせた者は驚いた様子だった。ただ、蓮は柱にもたれ掛かったままだった。

「生きているんだったら、捜してみようよ。」

おばばは元気よく言った。

「駄目ですよ、おばばさま。よく調べてみてからです。わたくしの邪魔をするくらいですから、侮ってはいけません。」

加賀美は慎重な姿勢を示した。

## 7（後書き）

やっと加賀美が動きだしそうです。

## 8

「蓮、あなたもあまり動かないほうがいいですよ。」

「うるせえよ、偉そうにわかった口利きやがって。おめえみたいなのを見てると反吐が出そうだぜ。これは、おれらの問題だ。何処ぞのお姫様には関係ねえよ、おれは好きにさせて貰うぜ。」

蓮は悪態をつくと、その部屋を出て行った。

それを見ていたおばばは、大きく溜息をついた。

「どうして、ああ捻くれちまったのかねえ。蓮には何も通じないね。」

「おばば様、蓮は由衣さんのことがとても心配のようです。でも、とにかくよく調べてみます。」

加賀美はやさしくおばばの肩に触れた。

それは硬く、働き者の肩だと加賀美は感じた。人の強さを感じる。きっと、蓮もこんなに硬く強い人物なのだろうと加賀美は思った。

「渡り、お願いします。調べてください。」

渡りは加賀美の言葉に静かに頭を下げた。

その日、継俊は久し振りに加賀美の屋敷に立ち寄った。

女房たちはいつものように少し警戒をして、神の祭壇のある部屋までしか彼を通さない。しかし、継俊は遠慮なく奥の加賀美の部屋へ御簾を潜り、勝手に入っていく。

「やはり、ここは別世界だね。静かで時が止まっているようだよ。あなたが巫女のお姿でなければ良いのだが。」
穏やかな微笑みを浮かべ、扇子で口を軽く押さえ加賀美の顔をじっと見る。

「どうなさったのですか？何かわたくしの顔についていますか？」
訝しがる加賀美などそっちのけで、あくまで自分のペースだ。

「いや、いつ見てもあなたはお美しいと思って。」
継俊は直衣姿に烏帽子を着け、年は二十代半ばといったところか。顔は細面で凛々しく宮中でも五本の指に入るほど女房たちに人気がある。彼女たちの憧れの的だ。しかし山のように文を貰っても、どの女人にも手を出さない。それが返って噂を呼ぶ。
この時代、結婚の形式は男性が女性の所へ通う、通い婚であるが、継俊が一人の女性の所へ通い詰めているという噂は今のところ聞かない。正室はいるのだが病弱で子供も無く、正室の所へも通っていないようなのだ。

「ところで先日、文でお願い致しました件ですが。」
継俊の視線わ振り払うように加賀美は尋ねる。

「呪術師の件ですね。今、一番と云われている呪術師がおります。真部人麻呂（まなべのひとまろ）という呪術師です。まだ若いが、なかなかのものと聞き及びます。」
「住まいなど、おわかりになられますか？」
「それが、少々調べましたがなかなかわかりません。兄上ならご存知かもしれませんが、わたくしが聞くのも如何なものかと。」
たしかに、継俊は腹違いの兄、重利（しげとし）とはあまり仲が良くない。
加賀美も重利には関わりあいたくない。重利に館を用意しようか

と言われたことがあった。つまり、側室にということだ。歳も継俊より十も上で、その上赤ら顔ときている。何よりも、中納言という自分の地位を利用したがる。加賀美はそれが一番嫌だった。
兄の光則に頼んで丁重に断ったことがある。今でも時折、文をくれることがある。
「そう……重利さま……。」
加賀美は言葉に詰まった。

「その件はもう少し他も当たってみよう。」
継俊は全てを知っているので、やさしく微笑んだ。先程まで口に当てていた扇子は懐に挿している。
「それより、もう少し他の話をしよう。なかなか加賀美とも会えないのだから。碁でも打ちましょうか、それとも双六でもやりましょうか。」
「……、でも今はそれどころではありません。それより宮中では何か変わったことでもありませんか？」
「わたしはそんな話はちっとも楽しくないよ。でも、仕方がないね。あなたにはあまり聞かせたくはないが。いつも何を始めるか、どきどきさせられるからね。」
「もったいぶらずに、教えてください。」
加賀美はにっこり微笑む。

「ああ、その顔、その顔。あなたのその顔が見たかったのですよ。」
愛しい恋人にでも語るように優しく言う。
「まあね、帝にもようやくご寵愛なさる姫が現れたのですよ。どちらの姫にも見向きもしなかった帝に。」
「どちらの姫ですか？」

継俊は少し困った顔をした。
「それが我が水元(みなもと)一族に少々縁はあるが、なにせ御父上も少将とお身分が低い。しかし、帝はたいそうお気に召されて、片時もお放しにならぬ。ところが先日体調を崩され、あまりにもお苦しみになられるので、ようやく、お宿下がりのお許しが出たところです。帝が泣く泣くお許しになられたとか。」
「初めて聞きました。不二原(ふじわら)の一族の姫を帝は嫌われておられると聞きましたので、宮中がどのようになっているか心配でした。でも、良かった。いくら身分が低いとはいえ、皇子をお生みになれば、宮中での待遇も変わってきましょう。」
「でも、そう明るいことばかりでもないのですよ。体調を崩されたのも、誰かが呪詛したのではないのかと、もっぱらの噂です。とすれば、皇太后様や不二原の一族が疑われるわけです。」
「
どういうことなのでしょう、呪詛などと恐ろしい。」
加賀美は首を横に振った。
「その姫様のご実家はどちらでしょう。わたくしお見舞いにお伺い致しとうございます。」
「ほらきた、あなたはすぐ、そういう事に首を突っ込まれる。だから、教えたくなかったのですよ。お兄様がご心配なされますよ。お止しなさい。」
継俊はいかにも恐ろしげに口を袖で押さえた。
「あら、継俊さまは気になりませんの？姫さまがどうのようにしておられるか。」
「わたしはあなたが元気であれば、問題はありません。」
「……。」
加賀美のほうがどう答えて良いものやら考えてしまう。だいたい

この従兄はいつもこの調子だ。何処まで本当か嘘か判らない。

「どうしました？あなたらしくない。そこで、強引に聞き出そうとするのが、いつものあなたではありませんか。あなたの困った顔を見るのが、わたしは好きです。」

「継俊さま、今日は変です。」

「……ああ、そこの几帳の後ろに、どうせ渡りが控えているのでしょう？つまらない、つまらない。あなたの袖にさえ触れることもできないではありませんか。」

「からかわないで下さい。巫女の袖に触れても恋は始まりませんよ。」

拗ねる加賀美を尻目に継俊は、ははは と笑い飛ばした。

「意地悪はこのくらいにして、教えてあげましょう。この文に場所を書いてきました。わたしは、姫には何度かお会い致しておりますので、わたしの使いで来たと言えば良いでしょう。あなたも水元の一族なのですから。」

そう言うと加賀美にいつもの加羅渡りの継俊の香がする文を渡した。文箱に香と紙を一緒に入れておけば、香りの良い紙となる。

「そうそう、渡り。加賀美を頼みましたよ。この姫は危ないことばかりするので心配です。」

几帳の向こうから「はっ」と渡りの返事が聞こえた。

「やはり、そこに居ましたか。」

継俊はまた、ははははと笑い飛ばした。
やはり、どこまで本気かよく判らない男だと、几帳の向こうの渡りは思った。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2405z/

月語り　ー花の章ー

2011年12月26日21時58分発行